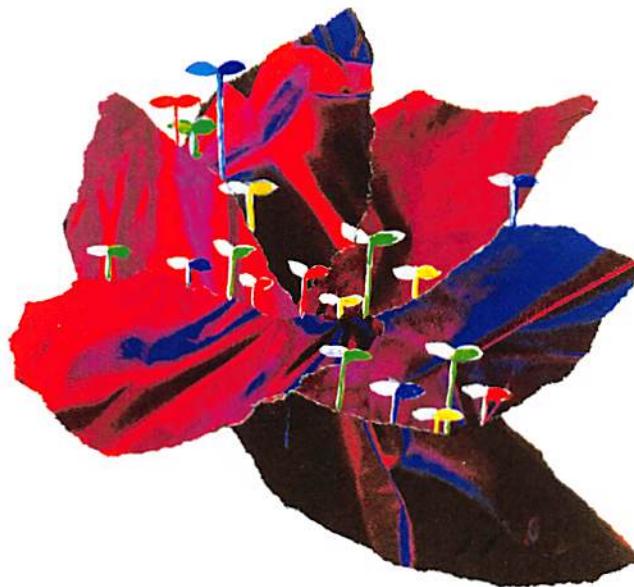


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023. 1



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未聞なものを同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的・精神的・本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇二三年 一月号 (通巻七七六号)

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子 60

◇遊覧香港〈現代短歌の始まり〉 渡辺真吾 62

◇今月の二十首詠……河畔にて

田土成彦 2

■作品[A]

白子れい・ばばりょうこ他 4

白子友侑子他 36

A C B A

浜名結衣他 64

畠澤博子他 74

片山幸子他 88

色井静代・潮田千代他 54

山川弘美・秋山真理子 50

坂本佐和子 53

私と短歌との出会い (245)

今月の二人・作品評

久我田鶴子 52

最近の歌誌より

〔編集部〕

一〇二二年度「地中海」謡上全国大会

参加作品、及び選評

【編集 藤田美智子】

103

得票一覧・結果発表

102

感想交流会

滝田靖子・遠藤眞理子・菅野順子

菅野輝子

(司会) 藤田美智子

クリップ……104 神田通信……表3

河畔にて

田土 成彦

昭和十八年生まれ。
宙の会所属。

歌集に「樹下黄昏」「糸遊伝説」などが
ある。

川の音聴くとしもなく行くものはかくの「ときか人も時間も
この川は夕波千鳥鳴き渡る湖を水源として流れ来る

鏡面の水面をわけて進むともなき小舟ゆくこの現世を

いにしへの朱の舟舟まぼろしに翳る水面に水脈は残さず

争ひの幾度もありしこの川の歴史に常に敗者はありて

川霧のなか浚渫船近づきてまた遠ざかる音のみ聞こえ

吃水を深く沈めて砂を積むポンポン船の音たからかに

濁流の渦が橋脚を襲ひゆく日すがらにして台風一過

捨て小舟砂に埋もるる歳月をうかうかと来しわわれかとも思ふ

莊嚴なひときにして葦の間を大きい日輪の沈みゆく見る

毛馬村は蕪村の生地上流の赤川村はわれの產土

長持ちの底より出でし道中差しにわかに親し遠おやのもの

大阪は京の下水を飲んだはるいやいや今は琵琶湖直送

ワードなど使ふ輩は非國民わが一太郎愛してやます

わが才は短歌に向いてるたのかと問へど答への出るはずもない

夜中ふと浮かぶ言葉を書きとむる儘き技もわれのたのしみ

わが眠る家の甍も照らしつつ今宵月明の空渡りゆく

癌検診受けしことなき五十年余計なことはしないと決めて

二十度を切つた夜ごろは虫の声聞こえずなりぬ窓を開けても

石灯籠の基壇に坐りゐる影はをさなきころのわれのまぼろし

作品 A

白子れい

月に誓う

・洛

家元より「名誉師範」の知らせ受く唯ありがたく胸のつまりりよろこびと共に分かたん夫も子も父ははもなく独りの胸に十三夜のあかるく輝く月仰ぎ今日のよろこびしかと告げたり十九歳で奈良女高師のクラブに入りしより続けたれり茶の道のみは五十年続けし教師生活のクラブ顧問はいつも茶道部身を心を律して生きん気を抜けば安きに流るる吾にてあればよるこひてばかりにあらず尚さら励まんものと月に誓えり

ばばりようこ

残響

・鹿

あまたなる罪を負うべく生を受け刃の荷をおろし人は逝くのか間隙を縫つて青葉をさしめりたださようならといたために禁断の木の実にあらずと笑み言いてやおらボッケのひとつを渡すカルミナ・ブランाを聞きいつ人生の哀感にどっぷりひたりてゐるバイオリンの弦を切らしたるは十三歳いまだ残響を曳きずりてゐる告白をためらひたるくちびるを半開きにしてくれないを引く僧のたまわく往生とは逝きて生まれることだと… 合掌

浜谷久子

夏休み

・地

飛行機を降り来る児らの上機嫌アテンダントの笑みに守られ宿題を持参の小学一年生アサガオ絵日記三枚だけと目まぐるしく暮らす夏の日三兄弟さらに三姉妹 足腰励ます男児女児計六人が家ぬちを行つたり来たり遊びは尽きず貧沢を言わず質素を知つている三人いれば生まれる兼ね合い背伸びする三男口をとがらせて自己主張するおさな顔にて親の待つ家へと帰る児らのリュック宿題だけは忘れぬよう

檜垣美保子

不在

・昂

青空と救急隊員三人にすべてをゆだねはこばるるはは豆苗をざっくりと切り炒めたりはは居なければ菜ひとつなり黄の菊の花びらぼくし酢の物に散らせばはなやぐゆうべの腐大根のかたちの箸置きひきだしにのこりて今宵ひとりの夕餉スイッチの音をたのしむごと灯すははの不在にたよりなき間たっぷりと日を浴びて花柄の蒲団に動かぬ秋のかまきりシクラメン深紅の小さき鉢六つならべ迎えん帰還待つこと

福田庸子 初穀

・今

初穀の高く積まる山の田の今年の実りまぶしくあるも
行き交へる端始の影を追ひゆくを夏の名残りの空が見ゆる日
手術着に付さる年齢を他人事に見つドクターの呼び出しを待つ
エアコンの音の広がる病室に秋の虫啼く家を恋ひゆく
ガスの火のあざやかにして見とれる新しき眼に迎へし朝は
祖母と母を兼ねてくれたる信州の下宿の娘と夢にて会ひぬ
伝へたる愁ひにこたふる娘の手五十余年前に戻る明け方の夢

藤田美智子

（ん）

・新

逝きしより年経てやうやく見えてきぬ母の抱きし悲しみの嵩
遺影にて初めて顔を見し人の眉の太さの眼に残る

不機嫌な自分をもてあましるならむ目にかかる髪搔き上げもせず
はつかなる頭の動きが心へなりセーラー服のリボンゆるませ
おのが県にとらはれてしまひ蜘蛛ならむしきりに細き脚を動かす
（ん）のみの音を返事と聞く夕べ土鍋の湯豆腐ゆらゆら揺れる
（夢を追う若者だつた）と見出しつく夢もてぬ君は弾かれてゆく

藤森巳行

シャンソン

・銀

シャンソンのチケットもらい聞きに行くクレール・エンジェールの歌にしびれる
フランス語せぬ我にシャンソンの言葉の豊かさ伝わりてくる
この歌詞だけみんなで合唱オオシャンゼリゼ園有名詞もフランス語なり
シャンゼリゼまだ見ぬパリを映し出すスクリーンの中街角に立つ
ダバダバダ続くスキヤット「男と女」愛の行方に不安が過る
フィナーレは「見上げてごらん夜の星を」日本語で歌ふこれもシャンソン
シャンソンはフランス語の流行歌と從姉に教はりしことも思ひ出す

船田清子 哲ひし不戦

・天

国防費増額などと騒ぐ中にがにがしと思ふ老いは幾たり
あれほどに哲ひし不戦を忘れ去り日本までもが戦力増強
西界ゆ仏陀はいかに見そなはす武力で利を得む人の騒ぎを
唐秦も馬鈴薯・甘蔗・茄子・胡瓜・エンドウ・トマト育てし戦中
佐保川のおたまじやくしを汲み上げて水盤に銅ひし遠き夏の日
法連草凍するには刻惜しみ刻を惜します歌案じる
行きすりにふと煮るあり木犀？と見上ぐるあたりはすでに夕闇

牧雄彦

（ンドシナ

・大

機窓より平野に茶色き川が見ゆ数多の人が死にし国原
見のかぎり続く平野に稻は稔りかの内線の影すらもなし
幾万の人が死にける内戦に血を吸ひし土を稻田が覆ふ
機はすでにカンボディアに入る平原に死のかけ消えず年経し今も
ブノンベン空よりくだる時に見つ茜に染まり建ち並ぶビル
平らかな涯の見えざる街並みに機は機首を下げ着陸せむとす
カンボディアは夕暮れ近し幾万の人が死にしは遠からぬ過去

松浦禎子

沿線

・羊

小田急の沿線に住みて十余年税を納むことなくなりて
欠点をぶらさげながらのそのひと生慎二郎の里秦野も近く
地中海の青春は如何にと誰か問うあなたが帰つて話して下さい
毎日が祝日となりて過ぎゆくに敬老の日の身を持て余す
身にしむる短歌の一首をほめあげて今日のえにしの幸い分かつ
日の丸を風にゆらして止まりたる祝日のバスゆくえはいすこ
「心の手入れ怠るな」との一言をのこし去りたる稻盛和夫

松瀬トヨ子 やんばる路

・沖

ひさびさに降り立つやんばる路彼方より盡氣含みてキジ鳩の声
いっさいを子等に頼りて過ごす日々描いて今日のやんばる路の風
辺りより木の香花の香たちこめるわが座上へ続くこの道
ちよろちよろと沢の音きこゆる林道に蟬のうた声合唱をなす
うりすんの山一面に真白なる伊集の花の香辺りにただよう
太古より紺碧の海島の海彼方辺野古の潮鳴り重し
辺野古湾上砂どつさりと落とされて水煙あがる青霞吐息

松永智子

みどり

・嵐

おとうとの脚に従きつ登りたるふるさとの山ぶりむく幾度
そのむかし莊園なりし野のみどりおとうとと並び山頂に立つ
ちちははの亡く弟のすでに亡くみどりのふるさといまにあたらし
螢火を手にすぐひつつ行く父を小走りに追ふおとうとの影
おとうとの足のみ見つ登りたる山の頂に立ちし日の空
玄関の闇ふかくして夜ごと覚めみるとなく見る螢火ひとつ
なにするといふにあらぬに点す灯の下に見上ぐる白き天井

三浦好博

終末時計

・鏡

眠るまま我が逝く時もかくのこと大夕焼けに包まれたし
夕光の衰へをれど妻と我的生者をいまだ照らしをりたり
家並の同じところに沈む陽の太陽系のスピード思ふ

太陽も地球も滅びに向かふとふ知りて恐れき少年われは
滅びる事恐れぬ老いになりたれど終末時計の残り時間は

命には優劣はない国界に「いのちを失ってはならない人」とぞ
信頼のできる國に番号で管理されるを吾も喜ばず

三木まり ことば

・昴

良い嫁になりたくない手を繋ぐ義母は刻々おさなこになる
幼子の真直ぐな日をして見つめくる義母の朝 指のリハビリ
寝返りも打てない義母は終日を陸に上がった鯨のように
深海を泳きたかろう海原を旅したかろう義母の部屋の天井たかく
天井に届くほどの窓の向こう小鳥の声してカーテンを開く
目も耳も疎くなつた義母の朝、秋の風がからだを包む
詩のことば歌の言葉を無くす日々早送りのまま二年が過ぎた

宮本靖彦

浮世絵

・凌

楠公さん親しむ社に風さやぐ半世紀ぶり一人詣でぬ
三宮の一隅占むる生田の森源平ゆかりの巨木縁影
花みづき紅葉まとふ街中にのぞむ箕面の滝道如何に
平安の鬼経ぎ源平 江戸幽女ボストン帰来の浮世絵たのし
記憶力いづこに逝きし連ドラの尼将軍の女優名出です
藤子唐の実を探りしあと肥料やる吾が好物のつくだにづくり
水漬けの種をひなたに置き換ふる日々に冷えゆく秋の日を追ひ

三好聖三

頬唐

・伊

南風あれで眞面に窓を撃ちつける雨あり秋にはいまだ遅き十月
あたらしくあかるく小さな図書館にからだほぐれてゆくらしまなく
足音にすばやく逃げる赤様蛇こちらはすぐむ草むらのなか
有毒も無毒の蛇も恐ろしく固まることの多き草むら
草むらがわななく気配毒蛇の一尾が跳ねて奔りたる後
頬唐の臭いを暗にしのばせて麻生久美子が瞬時を笑う
(意味の無き歌) を重ねる愚かさを肯いながら烟にあそぶ

御代田澄江 ふるさとの川

・茨

正月用の餅米寒風に洗ひ浸し終へ産室に入りお前が生まれた

幾度も聞かされし吾が誕生秘話嬉し恥づかし心ほつこり

歳末の父の手仕事竹串に里芋こんにやく開炉裏で炎る

父と母大釜に大豆八時間煮て味噌づくり火の元を見ろ

小さき餅一個擦り合はせ百元へ「良いこと聞けよ悪いこと聞くな」

恵比須像の掛け軸を掛け膳供へ財布上げればお金の増すと

結廻し手伝ひ手伝はれお茶作り炉に広げたる茶葉採むアチチ

茂木 城

稻穂通り

・埼

稔り田の稻穂通りを走るときラジオに流れるセブテンバー「ラブ

秋されば久下の長土手青草のなだりをちこち彼岸花咲く

コロナ禍の三年のうちに縁者より四人の寡婦の誕生したり

われよりも年下ばかりの主人逝き妹ふたりなほまた若く

マルちゃんの冷やしラーメン五食入り一食残し秋は来にけり

弟逝き姉は施設に実家へのお盆詣りもひとりとなりぬ

「ご自愛を！」ときたるメールを夕べには「五時愛」にして缶ビール聞く

もとむらしげと

雑感

・そ

死してのち棺の中に晒さる我が顔無惨と生きて思えり

我はいつ誰の加害者かゆきすりの人の言葉に深く傷つく

死刑制度ある日本にてそを望む者はためらわざ人を殺しぬ

人の死が開きたるパンドラの箱より出でしもの一人は知らず

反論の記者会見にてあらわなる肩間の怒り宗教家ああ

記憶というあやふやなものを盾として遂に貰かれて大臣辞せり

極貧の空にミサイルを飛ばす国誇る指導者拍手する民衆

八乙女由朗 山下雅子

・自転車天国

・柴

自転車のうしる荷台にゆわいたる宮城の新米「ひとめぼれ」なり

老人の乗る自転車は新車にて車道左翼を寄りて走れり

自動車持たぬ者は大方自転車に用足せり歩道を小さく走りて

一も二も直進ならぬあどけさよ自動車返ししと言いたくなくて

老人から自動車をはきし人々が追い越して行く異郷への道

異郷へと果てなく続く細き道自転車道は狭き長道

足踏みの飛行機こそが最適と逃がさず見入る朝ドラ明日も

山下雅子

この頃思つ

・習

さらさらとピングの砂は刻みゆくわれに尊き残りの時を

卒寿超え今も身に沁む勿体ないひたすら生きし戦時の名残り

老いて子にしたがう易さありがたさ多々ありなれどむなしくもあり

疊紙を開けば樟脳香りたち盛装のはの笑顔あらわる

一望する殻倉地帯は宝庫なり灾りの尊き身につまさるる

ゴッホ描きタ暮詠めるひまわりよウクライナの地を黄に染めて咲け

コロナ禍のウクライナ戦の終息を見るまで生きたし この頃思つ

山野幸司

コンバイン

・沖

エンジン音あわて引越すカヤネズミ秋の日差しの田んぼの中を

草を飲みエンジン停止コンバイン青空の下息吹き返す

堂々と田んぼを走るコンバイン貴女の天下私のスター

暮るるるまで稲刈り進む田に残り我とカエルと飛び跳ねて

いる

稲刈りに怪はおにきり妻と並む空にゆつたり猛禽舞えり

一日の疲労を癒す湯に没り並び妻と天井仰ぐ

お風呂場に互みに残る傷を見せ稲刈り作業明日を語る

山本 孟 バス停

・大

吉永惟昭 鎮守の杜の神無月

・熊

会議終え氣づかれるまま近く金木犀の香りにつつまる
バス停に待つ間ばかんと空見ればつばめ餌を捕り子育て懸命
外出はバスの時間に決められてわれの一日きざまれている
わが町はバスの時間に刻まれて老いたる足も意外に遠出
音もなく紙魚は本より逃げ出した古い本にはもうあきたかい
シジミ蝶二頭日向にからみ合いコスモスの野に顕つたり消えたり
国技館橋の入り横網入場の清澄の気満ち網迫り上がる

養学登志子

露草

・凌

露草の藍の清しさ摘みとりて小瓶に挿してと見こう見しつ
露草の高階に来し道程よ鉢の角に芽生えて咲いて
藍に澄み朝々に咲く露草の野生の強さもて根を張りゆく
野にあらばただの草かも鉢に咲き可憐なることながらにして
裏庭の草深き中抜きん出て紫苑ゆれいるなつかしの景
親とほほ交わぬ姿の子鳥の奇怪なる声まだ飼をねだる
唐傘をコンとはじきし太郎冠者わが持傘にも一本まじる

横田敏子

夢を食む

・福

晩秋の桂の林に分け入りて仄かに甘き香に包まれぬ

裸木となりし桂の幹周り匂う落葉の一面の海

かさこそと落葉を踏めば確かなる綿菓子のような香の匂い立つ
大粒の葡萄ひと房いたきて一粒ごとの夢を食みおり
心込めて詠みたる歌の日々届くもみじ色した切手を貼られ
雲ひとつあらぬ立冬日本晴れ布団を干せばポンと膨らむ
「来週にプレオーブン」と娘のメール念願叶うや小さな茶房

暖冬も秋立つ肌に沁む夜風神無月尽く季を知らせて
出雲路のわれの鎮守の神様はお布団くらい足りておわすや
神のいぬ社なれどもご供物は浴るるばかり秋の彩々
縁結び早く納めてコロナ禍で中止の祭り盛り上げましょう
予科練へ征く友送りし至純なる涙つみし鎮守の杜よ
何万回拍手打ちて頭下げ鎮守の杜に祈りしはなし
神信じず頼ることなく生きしが鎮守の杜はまだ暖かき

磯田ひさ子

二五

・森

大小の岩のあひよりしぶきあげ流れ一気に太る荒川
無花果の広葉にほこり積もる道人ら働き行き父ひし道
銘仙で栄えし鋸屋根の町はた織る音のいつこに染むや
紫の矢羽根模様の銘仙を形見と守るものままにあり
年経れば失ふばかり生きの日の音は消えたりましてやこゑは
若き日はただに働き失ひしものなど思ふいとまあらざりき
起きて寝て暮らす日々しばられず生きられる日は来るのだらうか

市原やよひ

富士山

・萬

許さるる面会時間十五分大事に通う電車三分

唐突に「富士山見たよ」夫言えり移りて来たる病室の窓
疑いを持ちて聞きたるその言葉富士は確かにそこにありたり
「帰りたい」を背中に重く貼りつけ病院を辞す暮れ早起き
縋る目を振り払いつゝ帰り来る灯りの点かぬ一人の家に
俺の事詠むなと口に出さぬ夫見れば大方ボツとなりゆく

鳥影がふっと悠辺をよぎりゆく秋空高く耀う中に

梅本武義　里の平穂

・羊

小野雅子　秋刀魚

・羊

空港へ降下の機影頭上行くこう音今日は活気を感じ
老いたなどわが家の坂に思いつつ木犀の香に佇む夕べ
児童らに郷土芸能見せんとの老いの熱意があふれよろける
蟻立て手伝う係にいにしえの初陣思う延谷明神
鳴き残る虫の音を踏み露に濡れ祖を偲びつつ鎮守へ歩む
大氣澄み百舌鳴く里の平穂に円安じわり申し掛かりくる
願望が夢の中に実現となる直前にまたも目覚める

大浪美雪　月

・森

神田鈴子　新米

・大

小湊線駅舎における芸術祭　村上駅に宇宙服オブジェの
昼天に下弦の月のかかる下宇宙服オブジェ「月行きを待つ」
真白なる宇宙服に身をかためオブジェは座せりカバンを胸に
D51の牽引なせるトロッコで月へ行くか宇宙服のひと
静岡に「月まで三キロ」の標識あり　近道なるか行つてみようぞ
「月行きを待つ」ひと残し丘の上　国分寺跡の塔跡に立つ
天平の基壇の跡の草はらにベニシジミ蝶はねを広ぐる

奥田陽子　秋蝶

・羊

菊地栄子　何があるんだ

・清

たましいの寄りいるならん秋蝶の群れいとこ遠ざかり申し
如何ならん疲れのありしかうた寝よりふかき眠りに引き入れられぬ
生くる日の足あとこのこす汀にて光れる石のひとつを拾う
灯の色の花を友より頂きぬ今はちいさき笛覗かせ
冬に咲く花が欲しきと求めたる球根しばし掌に乗せてみる
明くる年二月に花のひらくとぞ遠き二月とふとも思える
ひとと来て気配かそかに去らんとす秋蝶のはね見送りており

貴重品のことくトレーに入れらるる細く小さき秋刀魚を焼きぬ
氷からつかみ出すがに選びゆし秋刀魚の厚さ重さなつか
ランドマークの銀杏はでんと聳え立つ全身を黄に染めゆきながら
なつかしむ川われになしあこがれてコーラスを聞く「スワニーの歌」
遠くから聞こえるやうにひそやかに「別れの曲」のピアノ始まる
夕暮れの風は歩みを急がせておしろい花はまだ咲いてゐる
御節介やくのにも要る若さなり手伝ひたくてもわが手も痛い

北山雪男

認知の森にて

・伊

河野繁子

瑠璃鶴

・雁

カーテンを引きてスマホをなぞる指、特急列車の隣の席は運ばるのみにはあらぬ旅ありき窓開け駅弁買ひしあの頃インターネット無くとも不都合なき日々はとぼく翳めり健忘の目に会へばまづ既に非在のだれかの貌を肴に、白髪、禿頭、夢ならで草書のやうにたをやかに身をひるがへし去りしひとりは男どもは先に逝くもの、娘捨はなぜ娘捨かつらつら思ふに彼の名と認知の森にてはぐれしが二日後ふらり顔を見せたり

草刈十郎

赤提灯

・世

すんなりと消えぬ残暑にいらいらと仕方なき恩痴またこぼしをりおたがひに会へなくなりて幾年ぞ赤提灯を思ふ秋の夜天高し沈思默考一点を見詰めることき白百合の花、寝室の窓を開ければ金木犀夢の香りの現実となる島々の木の色づきてひとすぢの航跡夕日に照り映ゆるなり敗戦日万歳の声に送られて征きて還らぬ人のことふと少国民と言はれ軍歌をうたひつつ勝利信じて生きしあの頃

國井節子

遺伝子

・春

百歳まで生きたる母の遺伝子を受けて人生まだまだなし格子戸の汚れ気になり頼みたり水庄利用の掃除の早さ海とほく大和の里に住み古りて時に恋ほしむ海鳴りの音、秋草の最後を咲ける野紺菊踏みしだかれて見るかげもなくこの広い宇宙の中の星群の綺羅と輝くあれは木星夜の七時、東の空に光るのがそれと教へてくれし先輩

小林能子

「杉劇ひばりの日」・羊

磯子区民文化センター・杉田劇場は通院ルート「それが何なの」杉劇の特別企画「美空ひばりの日」スクリーン上演の呼び込み口上思ひ出はおとなに雄じり見上げたる青空舞台の楽団と少女焼け跡で勢ふ会社の式典に魅惑の絶景子おでんの屋台舞台設営は柔島組のお手のもの紅白幕に少女歌手唄ふスクリーンのひばりの笑顔あたたかく客席に湧く拍手たかまるすでに灯の点れる街のどこからか聞こえるひばりの「悲しき口笛」

近藤栄昭

津軽

・虹

トランヴェール太宰の影に出会いかる方言聞きたい津軽に向かう新青森急な減速奥羽線五能線へと津軽へゆつたり支線から支線へと進み迷いいる太宰の金木は静かな野面水はいり混る田ありて苗をうえ津軽吹く風花を浮かべる無頼派と言われし作家の仕草する小暗き部屋よ座卓純色斜陽館と名のつく羊かんうそ寒く太宰なるべし太宰を聾う北の地に籠もりたる熱吹き出るや津軽立ねぶた高く襲い来る

若田氏の乗る衛星が通る空十三夜の月縋くに併つ旧姓の若田なる母我はまだ存在のなき頃など想つ

台風の去りし次の日くつきりと木星つれて月十六夜

のこん菊むらさき咲けりこれの世の温みをそっと手渡す」とく北鮮のうつミサイルを溜める海あふれるはなし野紺菊咲く

政治家をまるめて絡む教会をどこまでほどく岸田氏の腕

胸痛むニュースばかりのテレビ止め耳をすませば瑠璃びたき鳴く

近藤芳仙 浪漫

・信

秋風の三才時を越えて訪ぶ土偶の二体 こころ急かるる

仮面つけて立つ女神手をひろげさあいらつしやいと「ひるる」とし
地中より出でし傷みのひとつなく「仮面の女神」仮面はづさず

世に出でて言ひたかりしを堪へしや仮面の下の顔に会ひたし

絆文の裸身のビーナス静やかに目を伏せて立つ 乙女なりしよ

二千年三千年の時をへし土器の欠片に絆様の映ゆ

詠歌の湖へ通ふもあり遠見ゆる湖面は緑き水をたたへる

坂上直美

秋来る

・天

昨日まで使いし扇引き出しの奥にしまいぬ白き風吹く

絆文の人らもかくや暮らしけん甘食みつつ栗を食みつつ
黄蝶舞いキンモクセイの香り満つ若墓古墳 御靈安かれ

衣替え君の着ていしセーターを陽にあててみる 溫もりかえれ
ふらここに誰もすわらず静かなり秋の公園晴れの日の朝

誰かすわれ力の限り消きてみよ小さき公園秋のふらここ
君あらば川辺の長き遊歩道相語らいつゆるりと行くを

坂出裕子

飛行機雲

・洛

どこまでも白く真つ直ぐ伸びゆける飛行機雲に立ち尽くしをり

外つ国を旅したる日も遠くなり書庫にねむれるトランク三つ
美術館博物館に行けぬ日を因縁ながめてしましなぐさむ

音読の電話をくれる孫のゆてコロナの日々のか明るむ
老いの日の楽しみに読む物語あしながらおじさんビルマの堅界
とほき目に楽しみ読みし物語こころふるはせ老いの日に読む

ねむられぬ夜のテレビに「運命」を聴きたり神のプレゼントなり
からつばの食卓の椅子にひとり居の母のまなざしとどまるならむ

佐藤道子 山の宿

・甲

夕日光きらめき差しくる山の宿障子に影がさらさら揺れる

百二歳の亡夫と私の誕生月山の湯宿に子等と祝ぐ

山の香を風が座敷に運び来る松の匂ひとかすかに桜

「夢の世と思ふも夢」の歌ありき夢と知りつつ旅を楽しむ

せせらぎの優しくひびく山の宿蛙の声も間近に聞こゆ

九十三歳普通に歩くが珍しと言はれて浴衣の帶きりりとす
「来夏まで命があれば再会を」夏逢ふ友に別れを告げる

篠原まり子

テレビ

・羊

若者語不可解なればチャンネルを回せどさほど変わらぬ理解
個展にて掲げられたる阿修羅像に阿修羅と違う心が重い

久しぶりに会いたる兄と母の微笑みて行う三十三回忌
公園の保育園児に思ははもバス置き去りのふたり幼子

フレモコウはわれも恋うと何時か知りつぶらつぶらにようやくの秋
蘇りのいのちの如く涼風は体を包む朝明けの道

B S の『RAILWAYS』二時間余夕暮れ早起き部屋に涙す

柴田登志恵

北向きの縁

・天

シンガーの足踏みミシンは宙からの光しづまる北向きの縁

かるやかに時空のあはひくぐりぬけ宙のむかうへ母旅立ちぬ

吹きそむる秋風ともなひ胸処までやうやう染みぬ母の不在が
若き日のありしことつい忘れしが母の手帖の抜き書き青し

餌も遣らずかまひもせぬに猫しげく訪ぶならむ母の坪庭

日溜りの屏へ眺びつく金茶猫母の居らばそのまま行きぬ

鈴木結志 春の七曜

・福

高尾恭子 サイレン

・大

年明けて春の七曜新たなる宵雲の夜とも歌時計鳴る
 世界初ブラックホールの撮影になぞときを待つ興味津津
 A-Iが虐待度判定する世の到来「口あんぐり」をしてはおれざり
 原子核世の第三文明に書芸ひたすら筆とりやまじ
 知命へのこだわり心理ふで文字に永存満たす自力はぐくむ
 一椀にあふる香り農耕の労役秘むる新米の味
 いくさ飢え世纪越え経て永存を「一陽来復」縁起に結ぶ

関根榮子

人さらい

・埼

誘われしことく曲りし轍道の野バラの朱実の一枝手折る
 藤袴ひと群吠けど心待ちのアサギマダラの飛来はあらず
 米二キロ買い来て重しそういえば五キロ買いしはいつ頃までか
 歩き行く彼方の空の飛行機雲消えゆくまでの存在示す
 ほんやりとしている時間ふと思ふ泳ぎ続けるほかなき鮎は
 隠れん坊いつ迄も隠れて夕暮は人さらい来るといわれし幼日
 明かりなき夕暮の道人さらい何處に居るかと思ひしあの頃

関根和美

残像

・埼

救急のサイレンが瓦礫にかさなって松崎町にこもるナタリー
 CGのような魔境を逃れたりワルシャワ経由の母娘の住処
 ボルシチが得意料理とナターシャの母は和室の西日をかさす
 核兵器もたぬ国へと逃れ来し母と娘の顔が碧い
 十一月はドバイにいたの白日の夢にあらずやスマホの記録
 絶望がいつか折りにかわるまで朽ちた墓標を染める日輪
 寄り添いて骸は黒き影となる〈戦え〉すなわち〈殺せ〉の陰画

高津砂千子

縁

・風

スバーへ忘れ物して二往復へクソガズラに笑われている
 倒れつづつ咲き続けたるコスモスは終わりにしようか霜月なれば
 コスモスの群生跡にフリージアの緑葉伸びおり力なきまま
 鉢植えを減らしてゆかな求めたるパンジーいくつ地植えになせり
 まくら辺に本二、三冊重ねおき眠る慣いは若き頃より
 紅白の水引草に宿りたる雨つゆきらり祝婚のあさ
 わが骨折をいたわりくるる文の来ぬ歌につながる縁のふかし

滝田靖子

生産性

・新

旧き家の廊かけまわる幼な児をおのが残像のことと息子は
 半月の滞在なるも去りたればこの空白を埋めがたしも
 手塙にぞかけたる孫を豪州へ連れ去りしその間に姑は逝きしよ
 学童の黄の帽見るは辛しとも通学路に沿い建つ家なれば
 年かさね孫生れ時間の集積のなかに省みるわが為しこと
 悔恨は限りもあらず眠られぬままに思ひぬこれまでの生
 線香の燃えつきるまで空けられぬ二十五分を待ちて戸を閉ず

こんな本があつたと母の持ち来しは成田一子の歌集『花がたみ』
 講堂の下に書かれし直筆の成田一子の文字のやはらか
 どこからが認知症なのかと思ひをり物忘れする危ふき日目に
 働ける夢から覚めるこの頃の不調の理由はこれだなきつと
 無気力な顔を生氣のない顔を映す鏡も辟易してゐる

生産性が無いと言はれてゐるだらう働く日常を放棄したわたしは
 ぼろぼろの身体やうやく愈えてきて氣力とふもの戻りくる少し

竹下妙子

秋深し

・霧

里山の杉に絡まる鳥瓜命燃ゆるか絆の色なせり
秋の陽の光を編みて散る銀杏何處のあたり旅ゆくならむ

木犀の落花ひとひら拾ひ上ぐ香にむせびつ過ぎ来し思ふ
合掌の形に一つのこりたる百合の蕾も命を鎖す
頼みよる相手を持たぬ身のあした淡き有明の月を見てゐる
わが夢に夜々よぎる影そはたれぞ黒きマントは誰とも知れず

夢さめて胸彈みるつ花ざくろ唇ふれしそれだけのこと

田土成彦

般若寺

・宙

露坐仏のかたへコスモスなびき寄る風ひそかなり秋の般若寺

寿司八貫即席赤だしノンアルのビール一杯今日の夕食

デザートのうばたま二つ抹茶添へ午後八時後はユーチューブ見る
ぼんぼんを冷やしちや駄目とばあちゃんの教へを守り八十路を越える
もし仮に不動明王がガラガラを振つたらきっと赤ちゃんは泣く
トランプであればウクライナ紛争は無かつた歴史にイフは無けれど
あんパンの今日は特価百八円二つばかり買ふ漉しと粒とを

田土才恵

秋桜

・宙

繫がれるえにしの不思議消しようもなく来た道をふと振り返る

懐かしく思い出されたわが名かな秋桜咲いたと電話が架かる
交わらない幼なじみの声されど会うを躊躇うコロナに老けて

早起きに三文の得あるのかも新聞の占い欄を先ず読む
時過ぎてしまえば元の本阿弥にされど三人の確かさ今を

備前焼にどかりと秋の花活けてやがて来るべき心の支度
暇そうに茶筅は置かれ係の言う緑のお茶の出番なきまま

玉井綾子

ルーティン

・羊

帰りたいとつぶやくルーティン休日で家にいるのにもう帰りたい
連勤をうかとばやけば子に僕は毎週五勤とたしなめられる
四日後は休みと自分に言いふくろめ踵から足を踏み出す前へ

給与分の働きせよと迫るのは定年後再雇用されし人
前年と同じことしてはいられない利益を出さねば存続はない

休み明けドラッグストアの原色の看板「くすり」を目で服用す
カレンダー掛け釘の位置変わらずに十月十日はスポーツの日へ

中島央子

渡し

・森

ジャンクション・インター・エンジ首都高は人の頭上を螺旋に走る

水の無き橋をわたるや地下鉄の江戸橋・京橋・日本橋駅

この町のバス停に多き橋の名前住宅ひしめく街筋に

川幅をゆるらに舟出しつちらこ櫓こぎも軽く矢切の渡し

彼岸花しう兩の中に咲き揃ひ声なく赤し只々あかし

陽の匂ふタオル畳める手の平に秋の一日を充たされてゐる

「春の海」合奏なし日の中遠く長詩院父の行年を越ゆ

永塚節子

咲の村

・銀

ひさびさの新幹線に身をゆだね友待ちわぶる咲の村まで

そばの花はや実を結び収穫の時を待ちおり秋の日穂し

再会はそばの花咲く咲の村約束せしも果たせぬままに

かや昔の民家の並ぶ咲の村色深みたる木守柿ふたつ

あかかと炭火の燃ゆるこの炉端坐しいる友の笑顔あらわる

天の河渡る白鳥その右にひときわ明るく光る木星

天に星地には虫のきらめくとう主の言葉に再訪約す

仲西正子 生命

・沖

わが肩に頬を埋めしひとあれば肩は木々濃き峠のこと

小野茂樹（『羊雲雑散』）

花をまつ琉球半夏を一夜にて食い尽くしたる青虫ごろり
でっぷりと琉球半夏に太りたる青虫羽化への力を貯めて

芽吹きてはアゲハに幾度あたえしや若き九年母の棘の銳し
上へうえへと行きて留まるカタツムリ下る姿は見たことはなし
「ぬちどう宝」阿波根「鴻そのとなり核シェルター記事くり返し読む
ウクライナの事にてあらずこの島に核シェルターまた避難の記事あり
事あれば逃げ込み息を潜めるや核シェルターから空は見えるか

萩 葉 子 丸い雨 銀

しその葉にセミのぬけがらとまつて こんな所に必死な虫が
拡大鏡片手にアリを追いかけるふりむいた顔にらまれる

里いもの葉の丸い雨が好き屏のきわにまたひとつ植える

中学の図書室で友と読んだ二百十日九月くるたび思い出す
ジャガイモの花が咲いていた物置の前私だけがあいに行く

バスの窓の秋の雲「ああ秋の雲」空が高い

右の標本がある二階の部屋 友の家の緑の石

久我田鶴子 自由 羊

ポイントと引き換へになに売り渡すあなたのためとささやかれつづ
もらふこと貯めること好き見透かされ笛吹きをとこに連れられてゆく

食レボをするやうになら言はないで黙つて空でも眺めてませう

ふはふはとSDGsを口にしてエコバグさへ持てば足るとか
Jアラートに中断されし番組に火野正平が香川を走る

協力を求むる顔に国よりの文書が届く学校図書館

お願ひにすぎずと言へり頼まれたからとも言へり専門官は

角川「短歌」に現在連載中の道浦母都子の「挽歌の草」。その第十二回（二〇二一年一〇月号）に大西民子とともに小野茂樹が取り上げられていた。はじめに掲げられている一首は、「あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ」で、「たつた一首で短歌史に残る、そんなうたがあるのだろうか。ここに掲げた一首は、そんな稀な一首であった。」とある。
そして、その次に挙げられていたのが掲出の一首。だが、「わが肩に頬を埋めしひとあれば春は木々濃き峠のことし四句目の「肩」が「春」になっていた。

これはおそらく、現代歌人文庫「小野茂樹歌集」（国文社）をもとにして歌が引かれたためだろう。この文庫版では、解説の大岡信の文中でも「春は木々濃き」と引用されている。

「わが肩に」と始まった歌は、「肩は木々濃き」と下の句でもう一度「肩」を繰り返す構造になっている。だが、「春」とされてしまったのは、同じ語の繰り返しをどこかで避ける気持ちが読む側に働くせいかもしれない。「木々濃き峠」に続くのだから、季節は春ではなく、夏が相応しいと思うのだが。文庫版の訂正はなされないまま現在に至っているようだ。
この歌について道浦は「女性が男性の肩^{（くび）}を頬を埋める。想像するだけでも美しいシーンだ。それを「木々濃き峠のことし」と表現している。こんな幸せはあるのかと、心おどらせている作者がいる。」と書いており、季節の意識はあまりなさそうだ。

（久我田鶴子）

一〇二二年度「地中海」誌上全国大会

昨年に続き二回めとなつた誌上全国大会には百六十名の参加がありました。多くの会員の皆様のご協力のもと実施できましたことに感謝申し上げます。一席から三席は次とのおりです。なお個々の得票結果は一覧表をご覧ください。

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 一席 調教師がるて騎手がるて自分では走りたくない
馬かもしれず | 小野 雅子 |
| 次席 おのおのの箸使う音カーテンの内に嘗むいのち
の夕餉 | 土井 敬子 |
| 三席 お互いに淋しきものか赤とんぼ時を沈めて肩に
止まれり | 三浦美代子 |
| 6 飲み干しペットボトルに涼風と夏の山並みつめこみ下
山す | 皆川 宏 |

出詠に統いての選歌と選評をありがとうございました。評文につきましては、紙幅の関係上、「他何名」と記載させていたいたもの、一部を省略させていただいだものもあります。あしからずご了承ください。

第一班

- 1 二万円の手形を切られ繋がれし鷦子ながらか何吐かさる
る

・鷦子の鷦子に例えることで、手形を切られた作者の口惜しさ、切なさが強く伝わってきます。また、二万円という数字が、格差が広がり、生活していく日本をうまく象徴していると思いました。

- 2 白河の闇を越えくる優勝旗福島通過ああ決勝

近藤 栄昭

- 3 一輪の花ほ呼ばれと眺めよと黄梅院に冥民の詩片

松浦 稲子

- 4 続口の閃きをらむ 向けられし瞬時のことを死者はかた
らす

近藤 芳仙

- ・身勝手なロシアのウクライナ侵攻による戦禍の状況を音数

の少ない短歌にのせてスパッと初句から結句まで無駄なく断言している。やるせなさのなかに途轍もなく響く力がある。

- 5 大豆煎る父の手元を見つめにき火鉢囲みし節分の夜

遠藤眞理子

- 6 飲み干しペットボトルに涼風と夏の山並みつめこみ下
山す

皆川 宏

・夏山を歩くのは楽しい。明るい日射し、登り切って眺める世界の美しさ。下山するとき、空になつたペットボトルに山の涼風と山なみをつめこんだという作者の、満ち足りた気持ちが伝わってくる。

・殺伐としたニュースの溢れる昨今に、登山の頂からの眺望。

そこまでの道程。その爽快感をも想像させて、明日への活力となり得る一首です。

(他三名)

7 風呂あがり忘れずに乗る体重計一喜一憂愛美にビール

桑田 幸一

・私も一週間に一度三百六十ミリリットルの缶ビールを頂きます。それはこの一週間恙無く生かされたことに感謝の気持ちで。この作者だって元気に生きていられればこそ。このご時世にこれ以上の幸せがありますか？

8 母の忌に娶りないと姉が問う姉なら言えり「入れ歯になつた」

菊地 栄子

藤岡みゆき

・白夜・ワインと聞けば旅をした北欧が即座に偲ばれる。作者にもそうした思い出が蘇っているようで、ほんのりとした表現が素敵。白ワインが効果的。

9 夏の日の夕暮れ時の白ワイン白夜の国のさざめき聞こゆ
10 うつし世に振り返る道未知の道さだめ受け入れゆるり一
歩前 浅川 広子

・見聞したことを詠うことが当然のように思っていた自分にとって、「未知なる道」を詠うとは、作歌の上で新しい世界を見た思いです。しかも「一世の階段をゆく」には、確固たる生き方の姿勢を感じさせられました。

・未来に向かって歩みゆく作者の、ゆっくりとした、弛みな歩み、未知の未来は戸惑いも覚悟のもと、詠いつつ行こうと詠われたユーモアと余裕がすばらしい。

(他一名)

11 石ばんに石墨書きを経て第三文明の書を得べく筆の技練
る 鈴木 結志

・自ら航空自衛官となつた子を心配してきたが、幸い戦争もなく無事に定年を迎えたことに安堵している。未だに終息しないロシアによるウクライナへの侵攻を憂えている。大勢の人々が命を奪われるようなことがあってはならない。(「定年を終う」は「定年を迎う」の方が)

12 夕暮れにやんちゃ坊主が笑みこぼし家に戻ったようなふ
るさと 色井 静代

・自ら航空自衛官となつた子を心配してきたが、幸い戦争もなく無事に定年を迎えたことに安堵している。未だに終息しないロシアによるウクライナへの侵攻を憂えている。大勢の人々が命を奪われるようなことがあってはならない。(「定年を終う」は「定年を迎う」の方が)

13 おろしたての鎌の刃の」とシャープなり無音の空の三日
月を抱く
・夜空の月を仰ぐといつもさまざまな思いを巡らす。無限の
広き闇の中に白くしつかりと存在感を持つて光る三日月。こ

の冷たい美しさをみことに見つめた好感のもてる歌です。

・切れ味抜群、鋭くて危なつかしいそんな刃に似た三日月。

何も言わぬ三日月だからこそ抱いてみようとする。この気持ちはと自らに問うてみた。それは小さき者たちをハラハラと、しかし温かい眼差しで見ている大人たちを連想した。

14 いっせいに横一列に飛び立ちて舞い戻るカモメ百羽を越
うる 土井谷恭子

15 ゆっくりと未知なる道を詠いつつわれの一世上の階段をゆく 藤野喜美子

17 似たような影をひきたり汽車を待つひとり参加の女の

鞠 高尾 恵子

・作者も「ひとり参加」なのか。何に参加したのだろうと想像させられる。この春、退職した友(女性)の「一人でどこにでも行けるようにする」という言葉と重なり、「ひとり」の行動が好ましく感じられる。

・映画のワンシーンを見るようなストーリーめいた作品に見入りました。ツアーや旅でしょうか。作者もまた一人での参加、どこか似ている境遇の一人の心情まで読み取れる。「女の鞄」は「女と鞄」なのか答えが出ない。

18 「こ自愛を」ときたるメールをタベには「五時愛」にして

缶ビール聞く

茂木 延

・まさに酒のつまみに似合いの歌と言おうか、しかし含蓄もあり面白い。間延びする言葉遊び、メール、タベ、ビールの音韻を踏む。共に述語「聞く」を共有するメールと缶ビール。ともすれば滑る言葉遊びの歌を技術が下支えしてよい心地である。酒があればなお。

・手書きのはがき、手紙の場合はこんなて字など考えなかつたが、電子メールでは変換という便利な操作で思いもよらない音の組合せで傑作が生まれた。作者はその現象を巧みに利用して作ったユーモラスな一首。(他二名)

19 菓包紙に平和を願い折りしとう小さきつるいくつ幼気な
指 今野 勝子

・菓包紙で折られた小さな鶴。「幼気な指」で折った子は長

悪いなのだろうか。病魔と闘う身でありながら鶴に託して世の平和を祈る姿が健氣で穎々しい。病室の情景が目に浮かぶ丁寧な詠みぶりに心惹かれた。

20 銀河ゆく地球号に乗り星ツアー今宵通過す双子座流星群
丁寧な詠みぶりに心惹かれた。

21 仰向けのままに落ちゆく虚空にて青く輝く満地球見ゆ
大浪 美雪

三浦 好博

22 原形をとどめぬほどに切りきざみそっと処分すピンクの
ブラジャ一 新明 彩子

・採られそそられるグッズが詠まれていてドキッとした。
「我が胸とすぶすぶなりしピンクブラズタズタにして過去を
葬る」派生歌ができちゃいました。

23 迫り来る嵐の前の静けさは箱裏居刻々朝明けの頃
篠原まり子

・台風の進路にはほんとうに悩されます。雨風がどのよう
に荒れるのか、戸締まりは万全と思いながらも不安な夜を過
ごし、朝明けを待たれる気持ちをひしひしと感じます。

24 「名月」は和製漢語と知るタベ高層マンションのベラン
ダに立つ 山本 孟

・中秋の名月に改めてその美しさや風習の意味を感じた作者。
「名月」は中國語ではなく和製漢語だと知った驚きと感動が
伝わる。月を見ている場所が和製英語のマンションのベラン
ダで、時代を経たグローバルな今を感じる。

25 古民家のコーヒー店の片隅で読書の時間カタルシスかな
指 今井 敏博

・古民家のコーヒー店の片隅で読書の時間カタルシスかな

- 26 明治座のバス停に聞く蝉の声フェイドアウトにかかるフェイドイン 五井 鍾子
- ・消えていく蝉の声、代わって聞こえる秋の虫の声にフェイドアウト、フェイドインの用例を見たが、ここでは蝉の小さくなっていく声と湧き上がる声を表現しただろうか。「かかる」の重層感に臨場感も。
- 27 食あたりコロナ感染細心に預る三児ひと夏がゆく 浜谷 久子
- かん高き園児の声のゆっくりと近づき二両の轆でんしゃ行く
- ・園庭のない保育園が増えているが、網電車二両で散歩しているのであろうか。園児は網電車が大好きである。「ゆく」と「近づき」という具体で網電車の安全性が、初句の「かん高き」で園児たちの興奮が伝わってくる。
- 28 かん高き園児の声のゆっくりと近づき二両の轆でんしゃ行く 伊東ミイ子
- ・園庭のない保育園が増えているが、網電車二両で散歩しているのであろうか。園児は網電車が大好きである。「ゆく」と「近づき」という具体で網電車の安全性が、初句の「かん高き」で園児たちの興奮が伝わってくる。
- 29 思い出を話すことが供養です僧の言葉におしゃべりの咲く 熊谷 操
- ・家畜を飼うということは、当然それに振り回されることである。生業としてそれを継ぐことになったのか、交代で家畜に水をやる約束だったのか、疲れで夜中に起きられない。回想の歌ならば四句は「変えき」と時制を合わせたい。
- 30 わがなかへ崩れおりたる押し花や はるか寒生の汝を憶いつつ 根岸 亮
- ・今は病気なのだろうか。この歌からはお父様が一生懸命牛飼いをされていた姿が浮かんできます。きっと頑張り屋だったのでしょう。なんだか切なさも伝わってきます。
- 31 またひとつ心に宝を抱えたりゆったり向き合う深まる学び 久保 幸子
- ・胸に重きものある時には「ケ・セラ・セラ」で乗り切る。良い方法です。私も時々します。「父常に言ひし」を「父の口癖」にすると現在になってしまい、ダメでしょうか。
- 32 昭和まで牛飼いし父「水やれ」と形相變える夜中二時過ぎ 菅野 輝子
- ・今まで牛飼いの度に母のみを心配し狼狽えたのでしょう。「もはやなし」に母の死を思い起こして切ない作者の心

第三班

- 33 我が内に一つの気がかり重くあり父常に言ひしケ・セラ・セラだと 西畠 瞳子
- ・ケ・セラ・セラの意味は「なるようになるさ」とか。お父様の言うように常にケ・セラ・セラのような軽い気持ちで人生を淡々とやり過ごしたいが、なかなか実行できぬ自分もまたかくありたいと共感いたしました。
- 34 速報の神戸の震度に狼狽うこともほやなし母在さねば 酒井 牧
- ・今まで地震速報の度に母のみを心配し狼狽えたのでしょう。「もはやなし」に母の死を思い起こして切ない作者の心

- 35 微笑みに汗が滴り落ちるなり涙か汗か 「赤子誕生」
もりやまきょう
が伝わります。
- 36 「赤子誕生」汗と涙で生み出す命、大切な大仕事をなし終えた安堵とよろこびに微笑む女性。そして、その喜びに立ち会う作者の感動が伝わる。
- 37 死よりなおつらい拉致だと思い知るこの世に棲まう鬼よなくなれ
山口美恵子
何十年続く拉致問題未解決のまま過ぎようとしている。親、家族の気持ちははかりしれない。何とかして退治できないものかと思います。
- 38 スタンドに並ぶ珈琲バリスタとう名前に釣られスイッチポン
永塚 節子
39 雨あがり葉の水滴に陽がさしてキラリ輝くダイヤのこと
田中 昌子
40 满州の土となりける祖母の名をもつ白萩の雨に濡れたり
菅野 順子
41 もの憂げに去りゆく夏の空にゆれ花色あせし百日紅よ
山角 和子
42 ころも整え夕ぐれどきを待つよう白きむくげは巻きとじて落つ
植田 和子
43 やさしい目で白いむくげの花をよく観察されたと思う。朝咲いて夜しほむ一日花。長い間準備してたった一日五弁を力尽くして開く。そしてくるりと花片を巻いて落ちる。人の所作のように詠まれたのに惹かれる。
・作者はむくげの花の閉じる時に焦点を合わせて詠んでいる。くるくると花ひらを巻きとじて木から落ちる花のはかなさと同時に夕暮れ時のさみしさが感じられる。
- 44 やんちゃだった娘が孫を諭す声その落ち着きに歳月思う
松野 正子
45 野スミレの時もありつつ花飾る殺戮のニュース止まぬ世
来栖万佐子
・灯りを消し、病のご主人とお月見、何とロマンチックなんでしょう。昔を思い、側のご主人の顔を見ると何と微笑んでしまいます。

に住み

上林 節江

46

言の葉を畠くを語源に「葉畠」と為すは一円切手の絵の人ぞ知る

47 夫なく弟妹逝きし令和四年只一人の孫に児が生る

中島 央子

柴田 紀子

48 調教師がゐて騎手がゐて自分では走りたくない馬かもしがれず

小野 雅子

・ゴールを目指す馬にとって、走ることは天性であり、喜びであると思っていたが、しかし鞭を入れられ否応なく走らされているのかもしれない。人間社会にも当てはまりそうな下句である。

(他一名)

・「調教師がゐて」「騎手がゐて」韻を踏んだ出だしはリズミカルである。さらに「馬がゐて」とはせず、「自分で」をしている。人間の世界でもお膳立てで動かされることもある。共感の表現のように思われる。

第四班

49

むらさきの西空に浮くやまぶきの澄む夕月は五日の頃か

宇井 秀雄

関根 和美

・手作りの子供服やお気に入りのシャツやブラウスの貝釦やパールやガラス入りの釦か、お母様には捨てがたい記憶を物語るものなのでしょう。丁寧に暮らしを紡ぐお人柄が偲ばれ、作者の親への深い愛情が感じられる歌です。

・その宝石のような鉢の中には見覚えのあるものもあるかもしれません。お母様にしても同じ思いで捨てられないで下さい。

(他三名)

51 きのう土手今朝田の道に会う夫婦思わず笑みてあいさつ

かわす

大堀 貞子

・下の句に読者も思わず笑顔になるような一首である。「土手今朝田」と漢字が続くので、「きのうは土手に」などの助詞を入れてもよかつたのではないか。

52 夕きよめ庭の落葉を集めゆく乾く体の落蝶も入れ

大久保麗子

・「定形の切手」「定形外の愛」という対比的な表現が面白い。一枚の便箋に無量の愛情を込めることもあれば、弁解の言葉を並べただけの厚い手紙もある。どんな中身でも定額で届くことは不思議であり、有り難いことでもある。本歌はやはり異性への手紙を想定したい。

(他一名)

54 幼き時聴きし「原爆許すまじ」テレビより聞こえ手の止まりたり

酒井 治子

・一瞬ドキリとさせられる。本当にみた夢の話なのか、十五の頃に抱えていた心の闇をこのようなかたちで詠ったのか、どちらにしても何か物語性のある歌だと思う。

56 大国の影がちらつく沖合を漁場に向うはちまきの人

57 吾を抱く腕の強き力よりつなぎゆく手の温もりを欲る

藤田美智子

・介護される側からの望みで力強い腕で抱かれるよりやわらかい手の温もりを介護にほしいのか。また、恋人どうしの愛の歌なのか。

・一首よみおろしながら、「プラボー！」と叫び、結句に至り、ウン？と首をひねった。上二句の欲喜の表現に対し、結句の「欲る」に一抹の寂しさを感じたから。けれども、もし

そうならば三句の力のよう字余りでも「も」と助詞が入るだろうし…と。つまりは結句の「欲る」がこの歌のカギとなつたようだ。

58 山削り高速道路の風にさく埋められてゆく辺野古の悲鳴

松瀬トヨ子

・基地沖縄の現状を書いた歌。名護市内をダンプカーが數台走り美しい海を埋めてゆくやりきれない思い「辺野古の悲鳴」胸がいたみます。

59 故もなく人恋しき今日さびさびと道を歩めば コスモス
一花

ぱぱりようこ

・真夏の静寂、訳もなく一人、侘しさの募るときがある。そんなとき、道端にコスモスが咲いていた。それは、一本であつた。

60 着きなか草生い茂る畑には老人見えずとうがんひとつ
大下陽志江

65 数えなら百歳ねと言えばあつさりと九十八歳と耳遠き母
れに草も茂っている。老人はどうしたのか。暑さで出て来られないのか。それとも、という思いと、今の農村の過疎の姿が重なって、心配になる。何か哀愁を誘う。

・今年の夏は激しい暑さが続いた。年老いた人にはさぞかし畑仕事は大変であつたろう。草生い茂る畑には青々と艶よく楕円形の大きなとうがんがひとつ残されていると言う。上の句と下の句の対比が強調された一首。

61 おのおのの箸使う音カーテンの内に當むいのちの夕餉

土井 敏子

・入院の夕餉のようすを詠んだ歌だと思います。仕切られたカーテン内の生活「いのちの夕餉」がぐっと胸にきました。

62 寝姿のアンモナイトの形して猫のメロンは起きそつにな

い 平山 一子

・実に気持ちよさそうに寝ている猫の姿が目に浮かぶ。アンモナイトの形というのも面白い。まるで化石のようにじつとしたまま全く起きそうもない。でも、作者が「メロン」と呼ぶと目を開きそう。

63 古びたる被爆ピアノ弾く白き指平和を祈る広島の朝に

設楽まゆみ

64 度でも蚊張吊り遊びせがみし孫 逝つてしまいぬその草咲けど

山崎 昭子

66 着きなか草生い茂る畑には老人見えずとうがんひとつ
泉 嘉穂子

66 リモートの会議にぬらりとあらはれてはだかの顔がこち
ら窓ふ

67 子にしたがふ齡となるもまれまれに苦言を呈す 母とい
ふもの

68 立派なお母様のすがたが浮かびます。幾つになつても母は

母、同感です。言い切った結句がいいですね。自信に満ちて

いて私も元気をいただきました。

69 焼き茄子のあわきみどりを味噌汁の具に新米の飯 秋の
朝 梶垣美保子

・色彩が目に浮かびます。焼き茄子の淡い翡翠色が見え隠れ
する味噌汁。炊きたての新米の艶やかな白。季節の物を頂く
なんとも贅沢な朝食。

70 裳塚に凭て何を話したろう日のまぶしきみまぶしく
て 養学登志子

・晴れわたった秋の日、高く積み重ねた蓑塚に寄りかかりながら話ををする若い二人。さわやかな陽さしの中の初々しい出会いにこちらもまぶしくなるよう。「まぶしくて」のリフレインが相聞歌をより軽やかに響かせている。

・甘酸っぱい青春時代の一シーンをうまく表現した。舞台装

置がよく、情景が目に浮かぶ。下の句のリフレインが効果的で一首の調べが整っている。「凭て」の送り仮名には「れて」と「れ」が必要だろう。

71 療養といふ名の隔離七日間みじんこの孵化始まるを聞く 天野 純代

・「療養」と言いながら、それは実際のところは「隔離」。

みじんこの孵化を聞いたのが、外界とのわずかな接点だった

ような。

72 日に新た生命の泉湧き出でて骨は三年で生まれ変わると
う

73 騒雨縫ひ朗らほがらに望月の家並の間に妙なるすがた
騒ぎ馴染む野鳥の声する夏の森声の主の姿見えねど

74 オカリナの音色響かせ歌わしむ夫を亡くして日の浅き友
う

75 秋寂びて余呉の湖訪ぬれば波風立ちてネッシー恐る

76 ワクチンを意識して見る二の腕に微かに残る昔の種痘

77 キンキンのビール一気に飲み干して「ああ極楽」と言
いたい下戸も

78 食卓にふたつ置かるる手榴弾夕日が差して「ゴーヤとなりぬ
牧 雄彦

・ゴーヤが手榴弾にみえたとはうたわない。そこが眼目か。

「夕日が差して」と時間の推移を具体化し「ゴーヤとなりぬ」と場面転換。ゴーヤだったのかと安堵しつづけ。覆い被さつ

てくる戦争の影のようないものを思わせる。

久我田鶴子 深井喜久代 森川 淑子 宮原 宏行

72 騒雨縫ひ朗らほがらに望月の家並の間に妙なるすがた
騒ぎ馴染む野鳥の声する夏の森声の主の姿見えねど

73 聽き馴染む野鳥の声する夏の森声の主の姿見えねど

74 オカリナの音色響かせ歌わしむ夫を亡くして日の浅き友
う

75 秋寂びて余呉の湖訪ぬれば波風立ちてネッシー恐る

76 ワクチンを意識して見る二の腕に微かに残る昔の種痘

77 キンキンのビール一気に飲み干して「ああ極楽」と言
いたい下戸も

78 食卓にふたつ置かるる手榴弾夕日が差して「ゴーヤとなりぬ
牧 雄彦

・ゴーヤが手榴弾にみえたとはうたわない。そこが眼目か。

「夕日が差して」と時間の推移を具体化し「ゴーヤとなりぬ」と場面転換。ゴーヤだったのかと安堵しつづけ。覆い被さつ

てくる戦争の影のようないものを思わせる。

・手榴弾を知るは、年配の作者と思われるが、「手榴弾」に無気味さを感じる。今のウクライナを思わせる上句、下句の夕日でのどんぐり返しが面白い。結句の表現も妙。きっと取り立てのみずみずしいゴーヤだったろう。(他二名)

79 レザイズの夫の車椅子いのち得て戦火に傷つくウクライナへ発つ

八田 晓美

・ロシアの侵略で傷つくウクライナ、どんな支援が良いか迷う。亡き夫が使っていた車椅子、大柄のウクライナの人にも役立つだろう。夫も応援してくれるに違いない。「いのち得て」が秀逸。

80 糸文の人らもかくや暮らしけむ草食みつつ栗を食みつ

坂上 直美

・秋深き日の夕餉、会話なく囁む音だけが響いている場面でしょうか。糸文の暮らしに思いをめぐらせている様子が伝わってきます。

第六班

81 虫の音を聞き名を次々と言ひあいき内職の母とその傍にいて

芦田 美代子

・秋の夜長に宽ぐ親子の様子が伝わってくる。でも母親は内職中、手を休めず、子どもの相手をしている。今は虫の数も内職をする母親も少ないだろう。母親が内職を終えたら、一緒に「虫の声」を歌うのかな。

82 「君かねえ」思はず出でたる土地雖とにかくここに生き遂ぐべしよ

中島 彩代

・下の句の「とにかくここに生き遂ぐべしよ」に、今までこれからも自分の生き方を肯定している作者に共感を覚えました。

83 劇団の看板女優の老婆役背を折り曲げて目まで小さく

小野 明子

「じゅん子さん」粗糲るわれにどこからか優しき声す友が立ちをり

齊藤 順子

85 すだち搾り紅茶を淹れぬやうやうに課題のエッセイ書き終へし朝

平尾はるみ

・課題のエッセイはきっと納得のいくよう書くことができたのでしょう。ホッとして、すだちを搾って紅茶をいれ、満ち足りた気持ちでゆっくり飲んだことでしょう。その時の気持ちがよく表されていると思います。

・ただ単純にエッセイを書き終えた朝のことを描写しているだけのように思えて、実はすだちを搾って淹れた紅茶を持つてくることによって課題を成し遂げた達成感と朝を迎えた爽やかさが見事に表現されていていい歌です。

86 われつよくなりたる心地す猛暑日に激辛拉麺たひらげたりし

遠藤千恵子

87 「酒癖の悪い男は嫌ですか?」その後彼女は電話に出ない

八巻 信隆

・言つてはいけない一言だった。酒癖の悪い人は最悪である。正直な心は大切にしたいが、時にマインナスに作用する。電話に出ない彼女。当然の結果とその原因が詠まれて面白い。まずは酒癖を直すこと。

88誕生日花描きてカードに切手貼る 花は五の緒少女は十
四 有馬さと子

・下の句の調べが心地よい歌である。投函するまでの作者の思ひはあるのだろうが、「切手貼る」はなくともよかつたのではないか。

89 夜とに細りゆく月 朝まだ寝床の窓に見えくるを待つ

国原喜美子

むらさきの色好きだつた母想ひ墓前に手向けむ竜胆の花

藤森 巳行

91 お互いに淋しきものか赤とんぼ時を沈めて肩に止まれり

三浦美代子

・肩にとまつた赤とんぼが作者の孤独を唯一理解してくれる存在のように感じられた一首と読みました。一瞬の出来事だったのでしょうか「時を沈めて」から時間がとまるような感じを受けました。

(他一名)

92 向日葵の黄色抜がる空の端で「んなにも背し 戰はむ
つき

本元由美子

93 忍冬の香る小径に青年は白杖を手にしばし佇む

鈴木 幸子

・花のさかりには甘い香りがただよう忍冬。初めは白く黄色に変わってゆく。青年はこの花を見たことがあるのだろうか。香りだけを知っているのだろうか。幾通りもの物語が立ち上がりてくる。しばし佇む青年の美しいこと。

・作者はこの小径も忍冬もよくご存じなのでしょう。小径に佇む日の不自由な青年。彼の嗅覚を通して胸に広がる忍冬の

イメージ。それを想像している作者自身が伝わってくる歌。

青年と作者の立ち位置にも興味がわきます。 (他二名)

94 背を伸ばし猛暑の夏を越えきたる紅きカンナに秋悽あまねし 安部 律

・メラメラと燃えるようなカンナの花。元気に猛暑を乗り切った。ようやく秋がやってきてやわらかい陽ざしにゆらいでいる。ほっとしたのは人間だけではない。秋陽は万物にあまねくそそいでいるのだ。思ひが伝わる。 (他一名)

95 携えるもののひとつを絶ちし日の朱印は指に粘りいるなり 久土田 薫

・携えるもののひとつは何だろう。印を押して絶ったものは何か? 絶ちたくなかつたが、印を押した。指に粘りついだ朱印は未練が残る感が出ていると思う。なんどうかと読み手は考えさせられる。 (他一名)

96 忽然と消えたかのような物事がす何處だどこよと老いたるふたり

綾 央子

第七版

97 強く弱くひがな一日降る雨になすすべもなく台風情報

辰巳 洋子

98 その役を機械に託しひつそりとなほ身の内に在るそら豆二つ

・透析をなさっている作者の忸怩たる想いと、なお身内にある臓器へのいたわり、その存在のやすらぎを詠まれている。さりげない詠みぶりがいい。

原澤 咲子

・腎臓を病み透析治療に生きる作者でしょう。厳しくまたもどかしい感慨を冷静に詠むユニークな歌。こもごもの複雑な思いは「託し」に祈りのようにこめられ、字余りの「なほ」から生米の腎臓を二つもつのに無念の思いを汲み取る。

99 久々の台風一過の日本晴れシーツも心もパリッと乾く

・長かった悪天候もようやく台風一過で青空となり晴れ晴れとした気持ちがシーツも心もパリッと乾くにとても良く出ているとthoughtしました。

100 戦日の母を泣かした汽車の窓七十七年今も忘れじ

石澤 利夫

・一番目の兄が戦地にたつ時誰かからの葉書で東京駅からのホームと時間が知らされ、母とゆきましたが、列車は黒いカーテンで閉ざされ、名前を呼びましたが、まもなく発車。母はその場で泣きくずれ、しばらく立ち上がることができませんでした。私の思いが歌われていて嬉しかったです。

・戦後七十七年経ても忘れられぬ光景とは、父を見送った日の母の泪でしょうか？戦地におもむく父が乗った汽車の窓にきぎまれた双方の思い、そしてそれを見つめた作者の思いが読者の心にせまります。

101 ハスキーナル九ちゃん歌う「明日がある明日があるさ」

へこたれるなど

山下 雅子

102 大会にいくどか着たる晴れの服出番なければ單筋に眠る

齋藤 健子

・「大会に」とあるが、何の大会であったのか。それにより、

晴れの服の形なども想像できる。人はそれぞれ年を経ることに「箪笥の肥やし」が増えてくる。四句目、「出番を待ちて」くらいが希望を与えるのでは。

103 曼珠沙華野辺に吹かるる赤き花時季を輝く矜持に充ちて

横田 敏子

探るのは父の残した道具箱はずれた吊戸も直しています

104 石塚貞美恵

眞庭 郁子

105 若きらは我意知りしかつれくるる帆ならふ港地中海かと

106 田中 富子

野玉 幸

憎しみて恋おしみて思う君のことだんだら縞を織りて二

十年

・君を思う心模様をだんだら縞の織物に。気持ちの変化が色を変えてゆくであろう、その二十年間にどのような色になつたのでしょうか。

・初句に憎しみときたので驚きましたが、次に恋おしみてとあったので良かったですと思いました。恋おしむとまで言える愛を重ね、だんだら縞を織つてもう一十年も経つたなあと回顧してられるいい歌です。「思う」君は「想う」君でしょうか。

107 ふるさとの自慢と間われ浮かびたる裏磐梯の青き青き沼

野本 仁子

・裏磐梯の美しい自然の景。「青き青き沼」とはやはり五色沼でどうか。字余りに思いが伝わります。「自慢と」は「自慢を」としたいです。

・自慢ではあるけれど、他へ言い広めたくない気持ちがあるように感じる。作者がずっと心を寄せてきた場所こそ、自慢

(他一名)

づ

辻田 聰美

のふるさとなのかと。

- 108 古稀近くなりて「福耳」とほめられぬよく霜焼けになり
し耳たぶ 鉢地川原朱美

・霜焼けになるような苦労の日も超え、古稀近くの今「（福耳）とほめられ」るようになられた。心豊かに過ごされているのであろう。耳たぶに焦点をあて歩んで来られた人生に思いを馳せておられる様子がうかがえる。

・生きている時間が長くなつた。その恩恵を受けとめたこの作品のユニークさは結句の霜焼けになりし耳たぶにあると思ひました。

- 109 駆けまわる子らの声消え風の泣くマンモス団地 細りゆ

<NI-PPO-N

西堤 啓子

・少子化の進む日本在りし日の賑わったマンモス団地が目にうかぶ。子どもたちの元気な声はきこえない。それを風の泣くで現在のありようを表されていて共感する。日本をNIPPONにした是非を知りたい。

- 110 前に影背中に月を背負いながら歩けば蟬がミンとひと声 杉浦 時子

長尾 さち

・この幼い人の純粹さを不用意な言葉や配慮の足りない振る舞いで傷つけることのないようになると願う作者の気持ちがよく表れている作品だと思います。

- 111 野に出でて世界に窓を開ぐ子と紋白蝶の淡い黄を知る 中山 誠

リ

・この地に長く住んでいるのだろう。かつては若い人達も多く、活気ある町であったことが思われる。客観的な視点で、高齢化の進む現代の世相を淡々と表現しているが、結句に感

・君は長年連れ添つた大事な存在。君を最期に見送るまで痛む背を作者は優しく撫でていたのだろう。その感触を覚えている右手で、今は痛む我が背を撫でているのだ。一人残された寂しさ、切なさが伝わってくる。

・作者の肩を撫でている右手には今も最後にふれた君の背の記憶が残っている。君の形代となつた右手を握りしめ独り生きてゆく作者の決意が心強い。右手はできれば「めて」と読みたいのだが。

- 114 まつすぐな眼の幼な子と過し来てますぐなる事怖るわ
れば 奥田 陽子

奥田 陽子

・この幼い人の純粹さを不用意な言葉や配慮の足りない振る舞いで傷つけることのないようになると願う作者の気持ちがよく表れている作品だと思います。

- 115 甲子園の決勝で満塁ホームラン心技ともに模範の育英ナ
イン 横田 美穂子

横田 美穂子

- 113 第八班
- 去年の秋最期に君の背を撫でし右手でいまはおのが肩撫

慨があり、共感を呼ぶ。

・一人住まいの老人が、また一人子供の許へと越していった。かつて驟やかで、皆で楽しいこと、悲しいことも分か合つて、過ごした家だった。そうして、この町もあちこちに空き家が増えた。作者は、寂しいけれど、その御老人がどうぞお幸せに過ごして欲しいと祈つているように思える。

117 台風一過雨戸を開けて深呼吸わたしをみてる鳥にVサイ
ン 高澤 匠子

118 縁側にモノクロ写真手縫い」と呪つぶやく思い出まつり
秋山 真理子

119 いつまでも居座るコロナにすべもなく作りしマスク孫に
送りぬ 江尻リエ子

120 楽しくてうれしくて飲む日本酒 あしたヘリセット深酒
になる 高橋 啓子

121 長蔵小屋を守りし人の眠る丘へ太き唐松の木道を行く
大寺 智子

・長蔵小屋の平野家は尾瀬の自然を守ることに尽力した。湿原の一角に平野家のお墓（ヤナギランの丘）をめざして歩く。太い唐松の間の木道に時間の奥行きも生まれた。二度訪ねた尾瀬に思いを馳せた。

122 色褪せしひらがな多めの母の手帳えんぴつの字さえ愛お
しき 今井マチ子

・お母様は生前、手帳に文字を沢山書かれたようですが、愛おしいですね。私も母が生前、ひらがなで苗字を書いたハンガーハーを今も保持しており、共感を覚えました。

・親と子、特に母親の存在は、年を経るほどに大きくなる。母上の1冊の手帳を具体的に表現したところが出色。鉛筆をなめなめ書いたであろうなどと思いがふくらむ。心に沁みる歌である。

123 かろやかに時空のあはひくぐりぬけ宙のかなたへ母旅立
ちぬ 柴田登志恵

・しずかなかなしみが伝わりその後心が解放されてゆくようなかなしみが昇華された作品。上句の表現には悔いのない一生だったと感じた作者がいると思います。

・お母様を見取られ、悲しく辛く淋しく心残りもあつただろう。一方でお母様が身体的または精神的苦しみや過去のしがらみ等から解放され、自由な世界へ旅立たれた安心もある。母への深い深い念を感じた。

124 萩・すすき・たははに供ふ名月に更けゆくじまお下り
いただく 虎谷 信子

125 泣くほどのことにはあらず父母の墓の荒れやうひたすら
見つむ 磯田ひさ子

・泣くほどのことではないのだ。墓参りが遅くなつたことなど父も母も笑つて許してくれる。でも本当は泣きたいほど申し訳ない。次は早く来るからねと手を合わせた。罪悪感に共鳴して切なくなつた一首です。

126 風去り家じゅうの窓を開け放ちしめた風がカーテンゆ
さぶる 小原 香里

許田 邦子

128 その怒り胸に銃取り敵撃つても最後に必ず死と憎しみた

篠原 優沙

妙なバランスを醸し出している。

第九班

129 もし仮にお不動さまがガラガラを振つたらきっと赤ちゃんは泣く

田土 成彦

・おもしろい歌であるが、作者はいつ何をきっかけにこんな発想をしたのでしょうか。

130 アスファルトに寝そべる夜の黒猫がひと声細く鳴きて擦り寄る

住田ひさ代

輪ゴムひとつに作菜教はれし日を越しキッチンの床に落

ちしを拾ふ

片山 幸子

131 固けれど甘み広がるいも天は母おらぬ日の父の力作

遠藤美智子

・たまたま母上の留守の日に父上が腕まくりをして作ってくれたさつまいもの天ぶら。ちょっとかたいけどよく噛めばじんわりと甘味が伝わってくるという歌。家族のつながりを感じられた。

(他一名)

133 オオタニサンイツテラッシャイ 日本語で伝える伝わる世界を走る

光広 祥子

134 化粧水しみこむしみこむ暗れた朝動物園ではトカゲ脱皮す

宍戸千佳子

・化粧水がしみこむのは命の衰えを感じる真剣な問題。一方、朝はやってきて、トカゲは脱皮して未来は続く。「しみこむしみこむ」の字余りの勢いとおかしみが悲しみと希望との微

136 名をすれば雑草くさを抜くにもためらいぬ虫取扱子むしとりあざしもそのひとつなり

山元 富貴

桃原 佳子

・「ふた皿の」「隣の」から二人の親密さが窺え、「何を話そう」からは不安感を潜ませた作者の期待が伝わってきます。スペイシーな香りを感じながら読者もワクワクドキドキしてしまう素敵な作品です。

・微妙な距離感にある二人が隣り合って坐り、物理的には近い。下句の内なる声に焦りやもどかしさが感じられ、心の距離も縮めたい作者を想像させる。「スパイスカレー」は、場の雰囲気を象徴的に表し、効いていく。

138 ババと呼び帰れば喜ぶ妻が居て介護の寝間のあかりを灯す

餅井 辰視

・帰るのを待ってくれている人が居る、また何かをしてあげる人が居るのは幸せ、と思う。「ババ」「喜ぶ」のフレーズに重みがあり介護の大変さを言わず、下の句の動作の表現があたたかい。一首心に沁みました。

・恐らくは寝つきりとなり認知症になられた奥さんを温かく見守り介護されている作者の姿が浮かぶ優しい歌。(他一名)

139 枯れ松の枝に止まりて百舌の鳴くヰヰヰ危機危機 地球が危ふい

國井 節子

・最近は地球の存続さえ危ぶまれることが増えています。核兵器、大気汚染その他もろもろすべて人類が作ったものです。それが小さな動植物に及んでいることを百舌の鳴き声から察している様子がよく表れている。

・枯れ松に止まる百舌の鳴き声を危機と漢字で表記し、結句も地球が危ふいと現在の世界状勢、戦争やコロナ禍とも重ね合わせる歌です。

140 子や孫の繪ふ彼岸の墓参りこのひとときを夫も見てゐむ
(他一名)

神田 鈴子

141 秋草を分け入り雨後の土を踏む白きズックに又スピトハギの実
藤田しん子

・スピトハギの実はやたらと衣服に付く。白いズックはまだ新しいのだろう。そこにも付いて季節感満載の歌だ。雨後の土を踏む感触まで伝わってくるような気がする。

142 「男前の大工おります」宣伝の文句太ふとバスに書かる

高津砂千子

・今どきの大工の腕には顔も含まれるのか。バスの横腹にこられを見たら思わず吹き出したくなる。確かに男前の大工なら腕つぶし強く氣づぶよく、ぐいぐいと工事が進みそうだ。意表を衝く歌い出しに思わず笑ってしまい、「ところで腕の方は?」と問い合わせたくなりました。大工のような世界でも「男前」が喜ばれる時代の空気を鋭くとらえていて、作者のユーモア感覚の豊かさも伝わってきます。

143 遠き日にゲーテを語りし卒業越す師よりの便り 幸くあらませ
藤澤 元子

144 故里は遠くなりけり同胞も幼なじみも声無く沈む陽

長畠美津子

・ふるさとは遠くにありて思ふものそして悲しく唄ふもの：距離的には変わりはないけれど老いていったり、亡くなったり、今はもう悲しく唄うばかり。なつかしいふるさとよ。

・信州が故里、大阪に住む八十一歳の私には全く同感な歌です。結句の「沈む陽」が少し唐突の感あり。「同胞や幼なじみの声きくことなく」と、遠くなつた原因は親しい人が亡くなつたからとされたらしいかが？

第十班

145 おずもじのまわりものだとおとんぼのわいにくれるはゆめのははおや 中林 昭三

・おもじ、おとんぼ、正しくは何を指すのかわかりませんが、わからなくとも夢に出てくる母親に対する作者の気持ちが伝わってきます。いろいろ想像がふくらむ、切なさも感じさせる歌ですね。訛つていいですね。

・幼い頃、おもしのお裾分けが末っ子の自分までまわってくれることはなかった。夢に出てくる母親は自分に与えてくれる。それはまさに夢のような母親の姿なのだろう。ひらがなと関西ことばが切ない雰囲気を醸し出す
(他一名)

146 むらぎもの心養ふ朝餉なり卓の果実は南国育ち

松井 みね

・上の句に「むらぎもの心養ふ」と枕詞を捉え、結句へと導いている。「心養ふ」には味わう喜びがある。一日の活力源

である朝食は心だけでなく身も養うもの。ここでは枕詞が効果的。

147 緊張のほどけぬ身体退職の後をいつまで張り詰めている

竜田 基子

・長い間仕事に従事してこられた生活が身に染みついていますから習慣というものは本当によくも悪しくも恐ろしいと思いました。まだまだ仕事ができる淋しさを感じました。「いつまで⑥張り詰めている」と⑥を入れたくなります。

148 可惜夜におとないきたる甲虫の硬き鎧と柔らかき肉

阿藤たつる

・甲虫の身体の外と内との対比が鋭く面白い。せっかくの良い視点なのに、初句・二句との関連が薄く、いたずらに文字を消費してしまっていると言える。もっと甲虫に焦点を絞った方がよい一首になると思う。

149 スニーカーに歩幅大きく歩きたり輝く八十路生きぬく為に

芦田 房子

・息子は整体師、私は米寿です。息子の教訓「散歩するなら大股に踵・爪先、胸張って深呼吸四、五回」私は実行しています。少しプラスして輝く八十路生きぬきましょ。

150 五歳児は空の上ゆく一人旅ふり向きもせず搭乗口へ

藤川 淳子

・キラキラと自信を持ち一人前へ歩み出す五歳児の姿。不安げな大人の心の内を、「ふり向きもせず」と詠われて胸がキュンとなります。両者の初めての大冒険を、すっきりと詠まれた歌だと思います。

151 さくら咲く里わの寺の案内板「往生は往き生まれる」とあり

甲田 啓子 紺野 結史

・淡々と詠まれている中に何か心の奥にすしんと響くのがある。百本のこけしそれぞれに心を入れて作り上げた人の無念が伝わってくる。震災のためか、コロナのせいか。遺恨のようなものが漂っている。

153 何ごともヤバイバイを迎発の若者語れよどこにが何がを

島根美智子

・思つたこと感じたことを適切な言葉で表現しなさいと、声を人にして言ってやりたいのですね。短歌を詠んでいるからこそ、何とももどかしく怒りさえ感じてしまつていています。154 はす向かいに越し来て半年若者のマスク顔しか知らない

今朝も

田土 才恵

・コロナ禍と言わずして、コロナ禍の世相をさらりと詠つていて魅かれた。なめらかに流れるような作風の軽妙洒脱さは長年を短歌に親しんでこられたであろう作者の技量を感じ入った。

155 ゆっくりと彩度落ち行く夕間暮れヒマラヤ杉の大き黒影

白子友希子

・スマホを使いこなして、ストレスのない毎日をお過ごしのご様子。コロナ禍になかなか会えなくともスマホでラインと

156

聴忘る

矢口 さた

コロナ禍のストレス緩和のスマホなりラインメールに難堪な大人の心の内を、「ふり向きもせず」と詠われて胸がキュンとなります。両者の初めての大冒険を、すっきりと詠まれた歌だと思います。

便利なものが私達を取り巻いている。難聽を忘るの結句に日々が満たされていることが読みとれる。

157 捨て石はそのままにしてその下に核シェルターの話ちら

つく 仲西 正子

・捨て石にしようとか、なろうとか、思うはずもない。帰らぬ人を助けたくとも、魂を鎮めたくともかなわず、「そのまま」はくやしい。シェルターでわが身を守ることを考えなければいけない辛すぎる現実に思いを寄せる。
(他一名)

158 ふどう畑に疎開児われはたどり着きぬウクライナの少年

はいまをさ迷う 今村 叶子

159 パートナー尽くし尽くされ身代はりであると思ひ付きた
るゆふべ 福光 敬子

160 うろこ雲つぎつぎ消えて杉山の上にほんのり半月光る

近内 静子

・そつのない一首で、個性はないが、従来の短歌としての型を保つ。いわし雲、まだら雲とも言われる巻積雲は空高くかかる白いまだら雲。夕方徐々に消えて杉山に半月がかかる。動きある景を詠み、半月の光を印象付ける。



誌上全国大会得票一覧

1	7	17	8	33	3	49	1	65	6	81	1	2	97		113	1	7	129	2	145	1	0	
2	1	18	7	34	5	50	1	4	66	1	0	82	4	98	7	114	1	0	130	1	146		
3	1	19	7	35	3	51	3	67	8	83	1	99			115	3	131	1	147	6			
4	1	5	20	6	36	1	1	52	2	68	5	84	1	100	5	116	7	132	5	148	4		
5	9	21	2	37	1	53	1	8	69	1	8	85	2	101	5	117	2	133	3	149	1	4	
6	1	3	22	6	38	1	54		70	6	86	2	102	2	118	4	134	2	150	5			
7	1	23	3	39	1	4	55	5	71		87	2	103	1	119	3	135	3	151	2			
8	1	24	4	40	2	56	6	72	2	88			104	5	120	1	136	6	152				
9	3	25	2	41	3	57	1	0	73	2	89	3	105			121	4	137	7	153	8		
10	3	26	0	42	1	7	58	1	1	74	2	90	4	106	1	0	122	8	138	1	8	154	3
11	1	27	2	43	4	59	9	75		91	2	0	107	1	123	9	139	1	0	155	2		
12	6	28	1	5	44	3	60	3	76	2	92	4	108	1	2	124	1	140	1	156	2		
13	1	0	29	9	45	2	61	2	5	77	6	93	1	3	109	1	2	125	9	141	157	3	
14	3	30	3	46	3	62	1	1	78	9	94	2	110	1	126		142	7	158	5			
15	1	4	31	5	47	3	63	7	79	1	6	95	1	3	111	3	127	1	143	2	159	1	
16	8	32	1	0	48	2	8	64	1	2	80	7	96	1	0	112	128	3	144	1	160	3	
9	6		8	9		1	0	3	1	3	7	9	9	9	3	6	4	8	2	6	9	6	8

感想交流会

ー全国大会詠草集を読むー

誌上全国大会を終えて、「新樹の会」五人のメンバーで感想交流会を行いました。滝田靖子さんを中心に、遠藤眞理子さん、菅野順子さん、菅野輝子さんという入会二年未満のフレッシュな顔ぶれで、率直に感想を述べ合いました。司会は藤田美智子が担当しました。

(個々の発言というよりは、意見交換のなかで出されたものは

*印を付して紹介しました)。

司会 まずは、百六十首を読まれての感想からお願ひします。

順子 百六十首を読んでみて思つたのは、短歌の素材の広さです。目の前のような花や昆虫、恋の思い出や地球上の大きな歴史的なできごとまで、何でも詠むことができる。あたりまえのことかも知れませんが、改めてそう思いました。また、たくさん歌を読んでいくなかで、「いい歌とは?心に響く歌とは?」と、表現について考える機会になりました。

輝子 ウクライナ侵攻が続く現状を踏まえ、ウクライナへ思いを寄せる歌、戦争、原爆など戦争や平和を自分とつながるものとして詠んでいる歌が心に残りました。新型コロナによる人間関係の変化や不安、高齢化の孤独など、自分の不安や孤独近く、共感できる歌もありました。

遠藤 短歌において大切なことはます「調べ」であると改めて感じました。初句から結句までなめらかに読み通せる歌は、内容がすんなりと胸に入ってきました。素材や表現の方法がさま

さまで、「地中海」の自由さのようなものを感じました。

滝田 全国大会ということを意識しきているのか、難しい表現や凝った言い回しをしようとしている歌が多いと感じました。

司会 ご自分が最も印象に残った歌を挙げてください。

輝子 79番の「Lサイズの夫の車椅子いのち得て戦火に傷つくウクライナへ発つ」です。このような取り組みがあることを初めて知りました。社会誌でもあると思うのですが、自分とウクライナとの関わりが詠まれ、作者が出てると思います。すでに亡くなられているのでしょうか、「Lサイズ」により大の姿が具体性をもつてくる。もう一度活用されることを「いのち得て」としているところにも、ウクライナの状況を踏まえると、「いのち」にこめられたものも重いと感じられます。

遠藤 作者にとつても思い出が残る大切な車椅子を人の役に立たせることができて、ほっとしているのだろうと思います。しかも戦火のウクライナで。

*「戦火に傷つく」という慣用句を用いない表現もあったのではないか。

順子 6番の「飲み干しペットボトル

に涼風と夏の山並みつみ下山す」です。汗をかきながら大変な思いをして山頂までたどり着いた満足感がよく表れてると思います。「涼風と夏の山並みつめこみ」という表現の独自性と視点のおもしろさを感じました。

*「涼風」まではわかるが、「夏の山並み」まではやや大げさではないかと思う。

遠藤 32番の「昭和まで牛飼いし父『水やれ』と形相変える夜



中二時過ぎ」です。声だけでなく、顔つきまで見てています。対象をしつかり観察していると思いました。現在のお父様の様子だけなく、かつては、「牛飼い」という命を育てる、常に緊張感のある仕事に真摯に取り組まれていたお父様の姿までが浮かび上がりました。

*「夜中二時過ぎ」になぜ叫ぶのか、認知症などの事情があるのだろうが、そのへんがわからないと鑑賞が難しい気がする。

滝田 最も印象に残ったのは55番の「父を刺す夢より覚めぬ青風の吹く夜は十五の少年となり」。たとえ夢であっても、父を刺すというのは強烈な印象を残す言葉です。

作者の心の闇がどんなものなのか、作者はどういう人生を生き、どういう日常を送っているのか、知りたいと思われてしまう、そんな歌です。

*十五といえば、思春期のただなか。青風の吹く夜に父親と何があつたのだろうか。物語性がある。

司会 今挙げてくださった歌以外で、視点や素材、感情の把握などに独自性があると思われた歌はありましたか。感想なども交えてお願ひします。

順子 48番の「調教師がるて騎手がるて自分では走りたくない馬かも知れず」は、作者は馬を見ているのでしょうかが、ふつうなら当たり前の調教師、騎手と馬の関係に疑問を持ち、馬の立場を想像しているところに独自の視点があると思います。

滝田 私も「馬は実は『走らされている』のではないか」という視点が面白いと思います。

司会 テレビの競馬中継で、なかなかカゲートに入らない馬を見かけますが、作者もそんな場面を目にしたのでしょうか。この



歌が実は今回の最高得点を得ているのですが、「馬」を詠つているけれど、これは「馬」だけではないという読みをしている読者が多いのではないでしょうか。期待をかけられているアスリートだったり、あるいは子どもだったり。

順子 61番の「おののの箸使う音カーテンの内に嘗むいのちの夕餉」は、一読したときは「いのちの夕餉」という表現をや大げさかなと感じたのですが、繰り返し読むうちに、入院中の病室での夕食を詠んだんだと思うと、大げさとは思えなくなりました。患っている人だからこそ、それぞれの命をつなぐ大切な一食。「いのちの夕餉」という言葉が心に沁みます。

輝子 コロナ禍で見舞うひとのない病室。カーテンの中で箸を使う音だけ。そこをとらえたいい歌だと思います。

遠藤 食事の音だけがする、ひっそりとした夕方の病室の様子が伝わってきます。心細さも。

滝田 状況はよくわかります。ただもう少し作者が出ればもっといい歌になるかと。実感がほしいと思います。

*「おののの」の中に作者がいるのだろうが、「おののの」という歌になるかと。実感がほしいと思います。

順子 138番の「パパと呼び帰れば喜ぶ妻が居て介護の寝間のあかりを灯す」は、お連れ合いを介護されている方の歌で、心に残るものがあり、私は選びました。

遠藤 私も選びました。ただ、「パパと呼び」から始まるのはどうでしょうか。語順をかえると、もっと心に届く歌になると思うのですが。

滝田 「介護している妻が自分の帰りを喜ぶ」という上の句だけでも歌になると思います。下の句まで言わなくてもいいような気がします。

司会 心に残った歌という以外に、個性が感じられる歌や気になつた歌があればあげてください。

順子 66番の「リモートの会議にぬりとあらはれてはだかの顔がこちら窓ふ」の「ぬりと」という擬態語が個性的でおもしろいと思ったのですが、みなさんはどうですか。

*マスクをとった顔を「はだかの顔」という表現が個性的。

「見ていく」でなくして、「なぜ」「窓ふ」なのか。

司会 「ぬり」とか「窓ふ」などの言葉から相手との距離感、

関係性が読み取れるというか、リモート会議のある種の無気味さのようなものもこうした言葉の選択にあるように思いますが。

滝田 53番の「定形の切手を貼った手紙には定形外の愛入れておく」の「定形外の愛」という表現に個性を感じました。

輝子 ただ「定形の」が「切手」にかかることにはならないのかと、そこが少し気になりました。

輝子 78番の「食卓にふたつ置かるる手榴弾夕日が差してゴーヤとなりぬ」の作者は、戦争を経験された世代なのでしょうか。手榴弾というとかなり物騒な氣もします。手榴弾が実はゴーヤという、どんぐり返しのようなおもしろさはあると思うのですが、比喩としてはどうなのでしょうか。

遠藤 食卓のゴーヤが一瞬手榴弾に見えたということですよね。ウクライナのこととかあるので、ドキッとします。

*ゴーヤと手榴弾にはやや無理があるのでは。(ここで比喩が話題に)。比喩によって奥行きを深くすることもあるが、かえつてわかりにくくしてしまうこともあるのではないか。

輝子 42番の「ころも整え夕ぐれどきを待つように白きむくげは巻きとじて落つ」は比喩が生きているのではないでしょうか。

夕ぐれどきの感じと木槿があつてていると思いました。

滝田 13番の「おろしたての鎌の刃」という表現もなかなか新しいと思います。

*62番の「猫のメロン」の寝姿を「アンモナイトの形」と表現したところもなかなかおもしろい。

司会 ほかに話題にしたい歌はありますか。

滝田 28番の「かん高き園児の声のゆっくりと近づき二両の綱電車行く」は、光景がよく見える歌だと思います。ただ園児らの声ですから「かん高き」は気になります。「園児」を「園児ら」としたいところです。

輝子 91番の「お互いに淋しきものか赤とんぼ時を沈めて肩に止まり」も心惹かれる歌です。「赤とんぼ」に自分の淋しさを投影しているような気がします。

*「時を沈めて」がよくわからない。「淋しきものか」と言いたいだろうが、もう少し抑えた方がいいのでは。

滝田 145番「おすもじのまわりものだとおとんぼのわいにくれるはゆめのははおや」の「おすもじ」「おとんぼ」は日常的に使ったことのない言葉だったので、意味がわからなかつたんだけどけれど、どうですか。それと、あえて全部ひらがなにしているのでしょうか。・・・。

遠藤 「おすもじ」や「おとんぼ」は関西の方言のようです。方言を使っていることや全部ひらがなにしたところに作者の工夫があるのでしょうが。



順子 方言を使い、全部ひらがなにするなどの工夫があつて、おもしろい歌だと思いますが、「ゆめにくれるは」ということは、実際は末っ子の自分には回つてこなかつたということなのか、末っ子の自分を甘やかしてくれたのか、母親は作者にとってどんな存在だったのでしょうか。

司会 大会などでは、どうしても票の集まりやすい歌というのがありますが、票数に関係なく話題にしたい歌を挙げてみますか。3番「一輪の花ほればれと眺めよと黄梅院に真民の詩片」はどうですか。

遠藤 私は「真民」がわからなくて調べて「坂村真民」という詩人のことだとわかりました。固有名詞の入った歌は、新しい情報を手に入れる楽しさやその言葉による広がりがありますね。司会 真民の詩片を受け止めている作者がいて、作者の生き方のようなものも歌から立ち上がりつけてきますよね。

滝田 叙情のある、いい歌だと思います。票が入つてもいい歌ですよ。

司会 どうしても、一読してわかる歌や共感できる歌に票や選評がかかるよりがちですね。表現の仕方に問題があるのかもしれませんけど、「ん?」と思う歌ともじっくり向き合つて大事なんじやないかな。自分とは違つた視点や角度が、そこにはあるかもしれないわけで・・・。

滝田 まだ取り上げたい歌がありますけど、今日はこのへんで終わりにしたいと思います。今日、いろいろと感想を出し合つてみていかがでしたか。

輝子 百六十首を自分なりに読んで参加したのですが、「複数で読む」ってこんなにも楽しいことなんだって思いました。自分とは違う視点からの読みを聞いたりてきて。「読んだつもり」

でも、自分の体験のなかで想像しているだけだったなとか。歌の言葉についても「特別の言葉でなくていいんだよね」ということが何度か話題になり、それも今日学べたことでした。

遠藤 私の発言は別として、皆さんの感想がすばらしくて、歌の鑑賞の仕方を教えていただいたように思います。今後の歌づくりにも参考になりました。お声をかけていただいた時には、私は無理なことと尻込みしていましたけど、このような率直に意見交換できる場に加わらせていただき、感謝しています。

順子 みなさんの意見になるほどと共感したり、納得したり、勉強させていただきました。滝田さんの「作者の位置、作者の姿が必要だ」というお話、自分がこれから作るときに意識しなければと思いました。「ふつうの言葉で」「作者独自の表現を」はなかなか難しいですが、そのことにチャレンジするのが面白いのかなと思います。

滝田 それぞれの意見を言い合いながら鑑賞することで、一首をいろいろな角度から楽しむことができたかな、と。解釈の難解な歌についてもさりげない発言や助言のおかげで鑑賞の手がかりが得られることもあるって、実りある充実した時間過ごすことができました。歌を作者の意図したとおりに解釈できるかどうかはその歌のもつ力にもよるけれど、読む側の力量にもよるなあと思いました。

司会 何をどう詠うかに止まらず、歌を読む力をつけていきたいということ、そのとおりですね。今日はありがとうございました。

* 話し合いは一時間を超えましたが、紙幅の都合上、参加者の了解を得て四ページに編集したものです。

